

右の二首は、当時有名な歌人であった伊藤左千夫の忌歌会で詠んでいる。家庭的には孤独であっても、歌の世界の交友もふえて、松倉米吉の生涯では、充実していた時期であったのである。

(新潟市立中野山小学校)

△會員近著紹介▽

大橋 勝男 著

『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』全四巻

序文の、藤原与一・小林芳規両恩師の賛辞に彩られた本書は、第三回金田一京助賞の授賞対象となった『関東地方域方言事象分布地図』(全三巻、昭和四十九年―五十一年、桜楓社刊)の解釈・研究編に位置づけられる。関東地方の全域(a、関東本土部地方―栃木県・茨城県・千葉県・群馬県・埼玉県・東京都・神奈川県、b、伊豆諸島―大島・利島・新島・式根島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島・青ヶ島、c、関東外周近接地帯―福島県・新潟県・長野県・山梨県・静岡県)に行われる方言を、方言地理学的方法によって解明せんとしたものであるが、その目的は、著者の言を借りるならば次の諸点にある。

- ① 関東地方域方言の現在状況を全一的・統一的に究明する。
- ② その全体的現在状況を、地理的・人為的諸条件をも考慮して比較することにより、その現在状況に到達するに至ったそれまでの歴史的過程・歴史的事情を逆視的に究明するとともに、その流れを承けた帰着として立つ現在状況を、今後展開していこうとする動向を展望的に究明する。
- ③ それらを通して、関東地方域方言を形成する下位方言領(一分派)の究明、各領の特性、各領間の系統派絡関係の究明を目指す。

④ その帰結として、関東地方域方言の成立史と同域方言の特性とを究明する。

⑤ それら諸部面の過去・現在・未来にわたる方言現象及びそれに関わる諸現象にみとめられる諸理法を明らかにする。

⑥ 関東地方域の方言を対象として方言地理学的方法の実践をおし進めうるかぎりなし遂げる。

従来のいわゆる言語地理学が、調査項目として語彙事項に偏重しがちであったのに対し、本書では言語要素の諸部面(音声・表現法・語彙)にわたって項目を設定して、当域方言を多面的に見ようとしていること、また特に文アクセント・文表現・特定慣用表現・文末詞・諸言いまわしを、調査項目として取り上げていることなどは、従来見られなかったことであって、本書の一大特徴とされる。ナマの方言に一步でも肉薄しようとする、著者の意欲的な姿勢が窺われるところである。

第一巻 [序説・音声事象分布論] 平成元年二月刊

序説

第一部 各図方言事象分布論

第一篇 音声事象分布論

第二篇 表現事象分布論

第三篇 語彙事象分布論

第四卷 [分布地質論・統括一般論] 統刊

第二部 関東地方域方言分派地質論

第三部 統括一般論

第一篇 関東地方域方言音声一般論

第二篇 関東地方域方言統括一般論

(B5判・各五二〇頁・各三三九九〇円、桜楓社刊)

(鈴木 恵記)